

古代日本語に現はれてゐる動詞型連用形の特殊形について

福田, 良輔

<https://doi.org/10.15017/2332858>

出版情報 : 文學研究. 57, pp.67-74, 1958-03-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

古代日本語に現はれてゐる動詞型連用形の特殊形について

福田良輔

筆者は、最近発表した拙文中に、文証ある古代日本語が接する前国語史の時代において、動詞の連用形が体言を修飾するのに用ひられ、連体形は連用形の文法的機能の分化に伴ひ後に成立したことを推定するに足る痕跡が、古代日本語の中に存在してゐることを述べた。以下この事を補足し旁々、これと関連する問題について述べることにする。

万葉集の東歌・防人歌に限り、現はれてゐる否定を意味する助動詞「なふ」の活用形が特殊の活用形式を有してゐることは、専門家には周知の事実である。

未然形

三三四 さ衣ころもの小筑波嶺つきはねの山のさき忘わすれ來こばこそ汝なを懸かけ奈

波壳

常陸 卷十四

三三六 会津嶺の国をさ遠あみ逢あは奈波婆な侶りひにせもと紐結なばさ

ね

陸奥 卷十四

三三三 人妻ひとつまとあぜか其そのをいはむ然しからばか隣となりの衣きぬを借りて
着き奈波毛
未勘国 卷十四

終止形

三三五 武藏野の小軸をんぎがきざし立ち別わかれ往いにし宵よひより夫むろに逢あ

は奈布な與ゆ 武藏 卷十四

三三九 伊香保いせ夫とよ奈可な中次なかつ下思しもひ出いる隈かみこそ為なつと忘れわすれ為な奈

布母 上野 卷十四

三四四 きはつくの岡おかの莖くぐみ非ひわれ摘つめど籠かごにも満みた奈布な夫となと

摘つままさね 未勘国 卷十四

三四六 对馬たいまの嶺ねは下雲したぐもあら南敷みな上かみの嶺ねにたなびく雲くもを見みつ

偲しのはも 未勘国 卷十四

三三五 水みくく野のに鴨かひの匏ははのす子ころが上うへに言ことをろ延のへていま

だ寝ね奈布母 未勘国 卷十四

三三五 月日つきひやは過すぐは行ゆけども母父おもしが玉たまの姿すがたは忘れわすれ為な奈布母

下野 卷二十

連体形

言六 遠しとふこな白嶺に逢ほしたも逢は乃敵したも汝にこそ寄され 未勘国 卷十四

言六三 屋解けば解け奈敵紐のわが夫なにあひ寄るとかも夜解げやすけ 未勘国 卷十四

言五二 とやの野に兎窺はりをさをさも寝奈敵児ゆゑに母に噴ばえ 未勘国 卷十四

言五五 まくらがの許我の渡りの唐楯の首高しな寝莫敵児ゆゑに 未勘国 卷十四

已然形

言六 可愛しみ寝れば言に出さ寝奈敵波心の緒ろに乗りて愛しも 未勘国 卷十四

言六二 或本歌曰、韓衣欄のうち交ひ合は奈敵婆なへのからに言痛かりつも 未勘国 卷十四

言五九 栲衾 白山風の寝奈敵持母子ろが製著のあろこそえしも 未勘国 卷十四

言五四 まを蘆の節の間近くて逢は奈敵波沖つ真鴨の嘆きぞ吾がする 未勘国 卷十四

右の諸事例によつて、未然形・終止形・連体形・已然形の諸活用形は明らかであるが、連用形の活用形には問題がある。已然形の事例に掲げた三四八二の或本歌

韓衣欄のうち交ひ合はなへば寝奈敵乃可良爾言痛りと

の「ナヘ(甲)ノカラニ」の「ナヘ」は「ナフ」の体言形で、それに格助詞「ノ」が付き、更に形式名詞「カラ」が付き、助詞「

ニ」が付いたもの、又は助詞「カラニ」が付いたものと説くのが通説である。しかして、古代語法には、活用語の連体形には格助詞「ガ」は自由に付いてゐるが、格助詞「ノ」が付く事例はないので、佐竹昭広氏などは、「ネナヘノカラニ」の「ネナヘ」を既に活用語としての資格を失つて、体言に転成した語といふ見解をとられてゐる。已然形「ナヘ」でないことはいふまでもない。筆者は、古代日本語を溯ること余り遠くない時代に、連用形が連体形の機能を兼ねてゐた痕跡があること、したがつて連体形「ナヘ」は連用形が連体形の機能を兼ねてゐた時代の痕跡であることを前出の拙文中に述べたのであるが、「ネナヘノカラニ」の「ナヘ」が連用形であることについて補説し、更に活用語の連用形の連体形であるか、連用形の名詞形であるかを考察することとする。

二

言七 ひなくもり碓氷の坂を古延志太爾妹が恋しく忘れえぬかも 防人歌 卷二十

右の歌の「コエシダニ」は、従来普通は、「越え(連用形)し(助動詞「き」の連体形)だに(副助詞)」と解されてゐる。しかるに、春日和男氏に傾聴すべき説がある。即ち、副助詞「だに」には活用語の連体形を承けた確実な事例が無い。したがつて、「越ゆ」の連用形「越え」に時・折を意味する古代語、殊に当時の東国方言に多く見える形式名詞「しだ」が付き、それに助詞「に」が付いたものと解される。現在の高知方言の「行キシダ」

「帰リシダ」と全く同じ構成法で、いづれも熟合形であり、「シダ」も同一語で接尾語的である。春日氏が従来の説を排して、

「越ユ」の連用形「越エ」に形式名詞「シダ」が付き、それに助詞「ニ」が付いたものとされる見方は卓見であり、賛意を表する。ただ「越エシダ」を現在の高知方言の「行キシダ」「帰リシダ」と同じく、熟合形と見られるのはいかがなものであらう。「碓水の坂を越えしだに」と格助詞「ヲ」とあることに留意すると、「シダ」は形式名詞であるから、「越エ」は連体形の機能が働いてゐるものと見なくてはならない。即ち、「越エシダ」は熟合形若しくは複合語的なものではなく、「越エ」といふ活用形が一語として連体形の機能を表はして、形式名詞「シダ」を修飾してゐるものと見るべきである。したがつて、連用形「越エ」は連体形の機能を表はしてゐるのである。この事は、八世紀の東国方言には連用形が、連体形の機能を兼ねて連体形として用ひられてゐた前時代の用法が遺つて行はれてゐたものと見ることができ

る。

四三 障へ奈弁奴命にあれば愛し妹が手枕離れあやにかなし

防人歌 卷二十

の歌の「ナヘヌ」は、「ナヘ」は「敢へ」の方言、「ヌ」は否定の助動詞の古形「ぬ」の連体と見るのが、従来の通説である。しかし、これは、下二段活「障フ」の未然形「障へ」に否定の助動詞「ナフ」の連用形「ナヘ」が付き、それに完了の助動詞「ヌ」の古形の連体形「ヌ」が付いたものと見ることが出来る。殊に八世紀の東国方言に事例が多いことは、筆者がかつて述べたところである。且つ、連体形「ナヘ」及び三四八二の或本歌の「寝なへのからに」の「ナヘ」の「へ」はすべて甲類の敬で表記され、已然形「ナヘ」の「へ」も同じくすべて「敬」で表記されてゐる。

しかるに、「障へ奈弁奴」の「弁」も甲類の「へ」である。卷二十の防人歌において諸国の防人部領使が進献した東国諸国の作者名明らかな歌においては、甲類「へ」はいづれも「敬」又は「弊」で表記されてゐる。しかし、四四三二の「障へ奈弁奴」の歌は磐余の伊美吉諸君が抄写して大伴家持に贈つた「昔年防人歌」八首中の一首であり、「昔年防人歌」に現はれてゐる甲類の四つの「へ」は、すべて「弁」で表記されてゐる。東国方言にはもと甲乙兩類の音韻的区別はなかつたのであるから、問題は無いやうであるが、それでも「ナヘ」の「へ」がすべて甲類で表記されてゐることは、「ナヘ」の東国音を表記してゐることになる。とすると、「障へナヘヌ」が甲類「弁」で表記されてゐることも、「ナフ」の連用形であることを思はしめるのである。

四四〇七の「越えしだに」の「越エ」は、連用形が連体形の機能をも果してゐた時代の名残りであつたのであるから、連体形「ナヘ」も同じく連用形が連体形の機能を果してゐるものと見ることが出来る。つまり、「越えしだに」の「越エ」及び連体形「ナヘ」は、連体形が連用形と同形で表はされてゐるのである。したがつて、「障へなへぬ命」の「ナヘ」は、下二段「障フ」の未然形に付き、連用形であることによつて、完了の助動詞「ぬ」の古形の連体形「ヌ」が付いた形と見るべきである。

三四八二の或本歌の「寝奈敬乃からに」の「ナヘ」については、前文中にすでに触れたところであるが、連用形「ナヘ」の存在が認められたことに基いて、更に考察を進めることにする。佐竹氏も懸念されたやうに、「寝なへのからに」の「ナヘ」が連体形であり、それに助詞「の」が付いたものと見れば、割り切れな

いものが残る。しかし、「ナヘ」を連用形の名詞形と見れば、助詞「の」が付くことは解決する。しかし、「寝ナヘ乃」の「乃」を助詞「の」を表記したものと見る限りにおいて、解決するのであつて、「乃」が助詞「の」以外の語音を表記したものであれば、別問題である。したがつて、「乃」が助詞「の」以外の語音を表記してゐるか否かを考慮する必要がある。

しかして、確定条件を表はす用言中心の接続語格に承応する文節は、用言中心の連文節又は体言を修飾する連用修飾語格であることが、構文上のきまりである。しかるに、三四八二の或本歌の「合はなへば」は確定条件を表はす用言中心の接続語格である。

また、「寝なへのからに」の「カラ」は、形式名詞と見ることが出来る。したがつて、「寝ナヘノ」は連用修飾語格の活用連語であり、乙類「乃」で表記されてゐる「ノ」は活用連語の連体形と考へられる。また、連用修飾語格が「カラニ」に続く場合、活用語の連体形又は連体形に助詞「が」が付いた形から続き、助詞「の」が付いた形から続く事例は見当らない。これは「が」と「の」との機能的差異に基くものと思はれる。したがつて、「ノ」は助詞ではなく、活用語の連体形と見られるのである。

「ノ」が活用語の連体形とすれば、助動詞「なふ」の活用形「ナヘ」に付いてゐるので、「ノ」は助動詞の連体形といふことにある。しかるに、東国方言では周知の如く、連体形の語尾のウ列音が屢々オ列音になつてゐるのである。しかし、甲乙兩類の区別ある音ではすべて甲類であつて、乙類の事例は全く見当らない。

また、「寝なへのからに」の「ノ」は助動詞の連体形であり、中央語系の「ぬ」の東国音と思はれる。中央語系で連体形が「ぬ」

である助動詞は、否定の助動詞の古形「ぬ」又は「完了助動詞「ぬ」の連体形の古形「ヌ」である。しかるに、否定の助動詞「ぬ」は未然形に付く。「寝ナヘ」は未然形ではないから「ヌ」の方言の「ノ」は完了の助動詞の連体形といふことになる。しかるに、完了の助動詞「ぬ」の連体形「ヌ」が「ノ」となつてゐる東国方言の事例は、

三五 さはだなり努を（常陸、東歌） 言六 夜立ち来努かも
（国籍不明、東歌） 言七 置きて来努かも（国籍不明、東歌） 言八 置きてぞ来怒や（信濃、防人歌） 言九 越えて来怒かも（信濃、防人歌）

であつて、いづれも甲類である。「寝なへ乃からに」だけが乙類である。この事が「ノ（乃）」を助詞「の」に見る説の一つの根拠となつてゐるのである。しかしながら、甲類の「ノ」を用ひるべきところに、乙類の「ノ」を用ひた例が、卷十四に、他に一例だけある。三四〇五の或本歌に「可美都氣乃」とある。これは「上つ毛野」であるから、他の事例の如く、甲類で表記すべきである。しかるに、「寝なへ乃からに」も三四八二の或本歌であるので、同一表記者によつて、甲類「ノ」を用ひるべきところに、いづれも乙類「乃」を用ひたと見ることができよう。とすれば、「寝ナヘノ」の「ノ」は中央語系の「ヌ」に相当する言を表記したもので、完了の助動詞「ぬ」の古形の連体形「ヌ」の方音と見るべきであらう。したがつて、「寝なへのからに」の「ナヘ」は、下二段活の「寝」の未然形に付いた連用形で、その連用形に、完了の助動詞「ぬ」の連体形の古形「ヌ」の東国音「ノ（乙）」が付き、更に「カラニ」が付いたものと見るべきであらう。

かくて、下二段活の動詞「越ゆ」の連用形「越エ」が連体形の機能を兼ねてゐる「越えしだに」と共に、助動詞「なふ」の連体形「ナヘ」は、連用形「ナヘ」が連体形の機能を兼ねてゐた時代の名残りとも見ることができるのである。したがつて、「なふ」は
ナハ（未然）ナヘ（連用）ナフ（終止）ナヘ（連体）ナヘ
（已然）
と活用してゐたのであつて、独特の活用型式を有する助動詞であつた。

三

物念はず 路行く行くも 青山を ぶりさけ見れば つつじ
花 爾太遙をとめ 桜花 佐可遙をとめ 汝をぞも 吾に寄
すとふ 吾をぞも 汝に寄すとふ 汝はいかに 念ふや
は、卷十三に、題詞に「柿本朝臣麻呂之集歌」とある三三〇九の問答体の長歌の問の歌詞である。

「爾太遙」「佐可遙」はいづれも歌詞の文脈から、命令形又は已然形と見ることは不自然である。「春花の爾太要盛而」（卷二十、四三二）と對比するに、「ニホエ」「サカエ」は下二段活の連用形であることが分かる。「つつじ花」「桜花」はいづれも枕詞と見るのが通説のやうであるが、「物念はず路行く行くも、青山をぶりさけ見れば」と述べてゐるから、青山につつじ花が咲き映え、桜花が咲き栄えてゐることを述べたものと解すべきである。したがつて、「つつじ花」「桜花」はいづれも枕詞ではなく、「つつじ花」は「にはえ」「桜花」は「サカエ」の主語であり、「ニホエ」「サカエ」共に述語である。しかしして、「ニ

ホエ」「サカエ」は、それぞれ体言「をとめ」を修飾してゐるから、連体形的機能を果してゐると見られるのである。しかるに、「にはゆ」「さかゆ」の連体形は、「ニホユル」「サカユル」である。連体形が用ひられないで、連用形「ニホエ」「サカエ」が用ひられてゐるのは、東国方言にすでに見られた如く、連体形の分化以前に、連用形が連体形の機能を果してゐた時代の用法が、中央語系にも残つてゐたものと見るべきであらう。なほ、卷十三の三三〇五の問答の長歌に見えてゐる「つつじ花香をとめ、桜花盛をとめ」の「香」は「ニホエ」、「盛」は「サカエ」と訓むべきものであることは、問の歌詞が全く同一であることから云ふまでもない。しかして、前時代の名残りともいふべきこのやうな語法が用ひられてゐる問答の長歌が、卷十三に入れられてゐることは、この長歌の性質と共に卷十三の性質を思はしめるものがある。

八世紀の東国方言には、中央語系では終止形から連なる助動詞「ゆり」「らし」が連用形から連なつてゐる事例が見られる。

三三〇五 乎久佐男と乎具佐助丁と潮舟の並べて見れば乎具佐可

利馬利 宋勤国 卷二十四

註 可利の利は類聚古集に知とある以外、他の諸古寫本すべて利とある。

三三〇三 わが妻はいたく古比良之飲む水に影さへ見えて世に忘
られず 遠江防人歌 卷二十

三四五〇の「可利馬利」については、諸注釈書は類聚古集のみに「可知」とあるに従ひ、「勝ち」を表記したものと見てゐる。しかし、筆者は類聚古集以外の他のすべての古写本に「利」とあ

るに従つて、「刈り」を表記したものとて歌意を解釈する。これについてはすでに述べたことがある。しかし、「勝ち」「刈り」「いづれにしても連用形に助動詞「めり」が付いてゐることに変わりがない。「古比良之」の「比」は甲類である。中央語系では「恋ひ」は上二段であり、したがつて乙類「と」である。しかるに、東国方言では乙_iは大部分が甲_iとなつてをり、他は乙_uとなつてゐて、そのまま_iであるものは僅少である。恐らく中央語系と同じく上二段活であつたらうが、甲乙両類の区別がなく、甲_iに発音されてゐたために、甲類「比」で表記されたのであらう。それにしても「古比」が連用形であることには相異がなく、したがつて「らし」は連用形から連なつてゐるものと見なくてはならない。

かやうに、中央語系では終止形から連なる「めり」や「らし」が連用形から連なつてゐることは、連用形が終止形の機能を兼ねてゐた時代の名残りが、まだ東国地方には残つてゐたものと考へられる。中央語系においても、「似る」「煮る」「見る」「着る」等の上一段活の動詞に、助動詞「らむ」「らし」「べし」、接続助詞「とも」がしばしば連用形から連なつてゐることは、古くは連用形が終止形の機能を兼ねてゐたといふ説も、強ち否定することはできない。それに、ラ変活の終止形が連用形と同じ形で、「リ」であることも、古くは連用形が終止形に用ひられてゐた時代の名残りとも見ることが出来る。

文証ある古代日本語において、終止形が連体形と同形で、終止形が連体形の機能を兼ねてゐた事例が少なからず見られることは、今更云ふまでもない。この事実を徹して、連用形が終止形と

同形であるラ変活の動詞型活用語の存在や終止形から連なる助動詞や助詞の一部が連用形から連なることも、文証ある古代を余り溯ることのない時代において、連用形が終止形の機能を兼ねてゐた時代があつたと推定することができよう。しかして、この事は、連用形が連体形の機能を兼ねてゐた痕跡が古代日本語中に残つてゐる事実と併せて考へるべき問題である。かやうに考へると、日本語動詞の活用形の分化・成立において、連用形が基本形となつてゐることが推定される。しかして、古代日本語において、上一段活・上二段活・下二段活の動詞は、連用形と命令形とは同形であり、四段活・カ変活・サ変活・ナ変活も文献以前において、連用形と命令形とは同形であつたと推定される痕跡がある。恐らく、ラ変活の動詞も連用形と命令形とは同形であつた時代があるのではあるまいか。「話す」といふ行為は、言語對話者へ

「話しかけること」「呼びかけること」であり、「命令すること」「も一種の「呼びかけ」であらう。したがつて、連用形と命令形とは同形であることは、連用形が動詞活用の基本形であり、連用形即命令形を基本形としてその他の活用形は、分化・成立したものと考へられる。日本語動詞の活用形は、連用形即命令形が基本形であり、諸活用形の成立中最も早く成立したものであらう。

四

八世紀の東国方言のみに現はれる否定助動詞「なふ」の連用形は「なへ」であることは既述の通りであるが、これに関連してやはり東国方言にのみ現はれる「なな」といふ形について、語法上の疑問がある。先づ、東歌及び防人歌において「なな」といふ形

が現はれる歌を列挙しよう。

東 歌

(1) 言元 新田山寝には着か奈那我に寄りあはしなる子らしあやに愛しも 上野

(2) 言元 しらとほふ小新田山の守る山の未枯れ為那奈常葉に もかも 上野

(3) 言吾 悩ましけ人妻かもよ漕ぐ舟の忘れは為奈那いや思ひますに 未勘園

防人歌

(4) 言元 わが門の片山椿まこと汝わが手触れ奈奈地に落ちもかも 武蔵

(5) 言三 わが夫なを筑紫へやりて愛しみ帯は解か奈奈あやにかも寝も 武蔵

(6) 言元 わが夫なを筑紫はやりて愛しみ帯(叡比)は解か奈奈あやにかも寝む 昔年防人歌

これらの事例における「ナナ」は、否定の助動詞「ぬ」の未然形「ナ」に、未然形に付いて話手自身がどうしたいと希望する意味を表はす助詞「な」が付いたものと見ることがができる。武田祐吉博士も「万葉集全註釈」でそのやうに見てをられる。(2)の「守る山」までは序詞である。「未枯れせな」は二人の間の愛情がいつまでも続くことを歌の作者自身が願ふ意味か、作者自身がいつまでも老いなくて若々しくあることを願ふのか決め難いが、いづれにしても話手即ち作者自身の行為に対する希望である。(5)と(6)とは同歌の異伝と思はれるが、この両歌も(3)の歌も、「ナナ」の下の「ナ」が作者自身の行為に対する希望を表はす助詞「な」

」であることは明らかである。(4)も「自分が椿の花に手を触れたならば、椿の花が地に落ちるかも知れない。だから、わたしは椿の花に手触れたくない」といふ意味で、作者自身が椿の花を愛惜してゐる情を表はしてゐる。やはり「ナナ」の下の「ナ」は、話手即ち作者自身の行為に対する希望を表はすものと解して差支へない。(1)の「ねには着かなな」の「ネ」は山の嶺に寝を云ひ掛けたものと思はれ、またそれに譬喩が入り込んでゐると思はれて、表現内容を明確に捕捉し難い。しかし、上二句は、武田祐吉博士の解されたやうに「他の嶺には続かないでいたい」の意。他の配偶者を得ないでいたいとの意」にも解せられ、また、自分自身が寝たくないとも、更に共寝をしたくないとも解されないことはない。しかし、右の「ナナ」の事例の見える六首の中、(1)を除いた他の五首においては、「ナナ」の下の「ナ」は、話手即ち作者自身の行者に対する話手の希望を表はす助詞「な」と見た方が無理がない。したがつて、(1)の「ナナ」も、例へば武田博士の如く、他の五首の「ナナ」と同じものに解することも強ち否定し難いのである。しかも、右の六首の歌の文脈や構文の上から云つても、「ナナ」で文が終止してゐるものやうである。

言六 あせと云へかさ寝に吾はなくにま日暮れて夜なは来奈爾に明けぬしに来る 東 歌

言七 梓弓 末に玉まきかく為為寝莫奈なりにし奥をかぬ 東 歌

注 莫奈は、元・類・西等の諸本に従ふ。

三四八七の「寝莫奈」は「寝」に否定の助動詞の原形「な」が語幹として付き、更に提示・強調を表はす助詞「な」が付いたも

のであらう。否定の助動詞の原形が「な」であることは、すでに先人によつて説かれてゐるやうに、形容詞の語幹が「な」であること、禁止を表はす副詞「な」や助詞「な」の存在から推定される。

三四八七の「寝莫奈」の「寝莫」は、「寝」に形容詞「なし」の語幹、禁止の副詞「な」、禁止の助詞「な」と語原を同じうする「ナ」が付いたものと考へられる。しかして、この「ナ」は、ナニヌネと活用した古形の否定の助動詞の活用形の「ナ」であり、この「ナ」からニヌネ等の活用形は分化したものであることは、すでに説かれてゐるところである。語幹の「ナ」がそのまま、体言としても活用語としても用ひられてゐた時代の用法の名残りである。下の「ナ」は提示・強調を表はす助詞「な」である。したがつて、「寝ナナナリニシ」は「寝ないことにぞなつた」の意味である。したがつて、「新田山寝には着かなな」以下の六首に現はれてゐる「ナナ」とは、下の「ナ」が異なつてゐる。

三四六一の「来なに」の「ナ」もやはり「寝なな」の上の「ナ」と同じく、禁止・否定の原形「ナ」がそのまま用ひられたものである。「来ぬに」の「ヌ」に相当するが、「ヌ」の方音ではなく、活用形の分化以前の原形の「ナ」が用ひられたものと思はれる。

したがつて、八世紀の東国方言に限り現はれてゐる否定の助動詞「なふ」の連用形は「ナへ」であつて、一歩譲つて「寝なななりにし」の「ナナ」、「来なに」の「ナニ」がかりに連用形的であることを認めても、それは「なふ」の連用形と認めることはできないやうである。

註

1 明治書院「日本文法講座」第三卷文法史所載、佐竹昭廣氏「上代の文法」七三―七四頁

2 「萬葉」第十七號所載春日和男氏「碓氷の坂を越えしだに」

3 「萬葉集大成」第六卷、言語篇所載拙稿「東歌の語法」二五五―六頁

4 「萬葉集大成」第四卷、訓詁篇所載、拙稿卷十四、二二―二一頁

5 「萬葉集全註釋」(新版)東歌三四〇八の歌の解